

楼蘭の黙示録

彷徨える湖と楼蘭は、
いかに地上から消滅したのか

I N D E X

西暦327年晩夏	落陽のロプノール	11
西暦2008年9月	美知子	19
西暦327年初秋	憂鬱のミリア	37
西暦2008年9月20日	終末論	51
西暦327年秋	ソモナの述懐	59
西暦2008年9月20日	楼蘭の美女	71
西暦327年初冬	楼蘭国王学校	85
西暦2008年9月22日	トルファンの旅人	97
西暦327年冬	シヨーラの呻吟	107
西暦2008年9月23日	敦煌	115
西暦327年嚴冬	衝擊の事実	125
西暦2008年9月23日	玉門関から魔鬼城を越えて	143
西暦328年浅春	襲来	157
西暦2008年9月24日	楼蘭発掘調査隊の再構築	165
西暦328年春	王妃アレクサとソモナの死	173
西暦2008年9月24日	楼蘭こそ、日本	185
西暦328年春	楼蘭の春	191
西暦2008年9月25日	計画変更	199

西暦328年春	国王の酒席	209
西暦2008年9月30日	楼蘭発掘調査隊再発進	215
西暦328年遅い春	大脱出	227
西暦2008年10月1日	湖底	237
西暦328年初夏	襲来	251
西暦2008年10月6日	ロプノール掘削	261
西暦328年初夏	鉄槌	269
西暦2008年10月6日	水を失った秘密	279
西暦328年夏	苦悩のウスマ	287
西暦2008年10月10日	発掘	295
西暦328年冬	楼蘭国王の涙	301
西暦2008年10月11日	四つの棺	307
西暦341年秋	シヨラの歌を訊け	317
西暦2008年10月11日	『黙示録』は雄弁に	327
西暦343年秋	楼蘭への帰趨	337
西暦2008年10月11日	述懐	343
西暦343年秋	ミリアの死	349

序

二〇世紀のただなかに少年時代を過ごしたわたしたちを空想の世界へ駆り立て、冒険への覚悟と準備を迫った一冊の本があった。

それはスウェーデンの地理学者スヴェン・ヘディンの著した『さまよえる湖』だ。

地球上最後の地理的空白地帯とされ、その位置を特定することの出来なかった湖ロプノールを探すというのである。それはタクラマカン砂漠を、まるで蓮の葉の上を転がる水滴の如く彷徨っていると思われていた。

湖の北西に紀元前二〇〇〇年もの過去から、絢爛たる文化を築いた楼蘭という名の王国が存在した。いくたびの興亡を繰り返しながら洋の東西を結ぶシルクロード交易の要衝として栄え、そして忽然と砂の中に姿を消した。まるで歴史の闇に葬り去られたかのように。

一九三四年、スヴェン・ヘディンは丸木舟で塔里木河（*註一）を下り、満々と水を湛えたロプノールに到達し、あまたの議論に終止符を打った。しかしヘディンの唱えた流砂の堆積説もふくめ、なぜ湖が移動するのか、楼蘭王国はいかに栄え、そして消滅したのか、その謎は現代でも説は定かではない。

本書は、あくまでもわたしの空想の産物に過ぎない。少年時代から紡いできた、この地への冒険行の仮説的結論が、この『楼蘭の黙示録彷徨える湖と楼蘭は、いかに地上から消滅したのか』という物語である。

二十一世紀、わたしは複数回にわたり水を失ったロプノールの地に立った。そこには驚きの光

景が広がっていた。

一辺が四〇キロを超える巨大な塩水プールがあり、原発かと見紛うほどの冷却塔が立っていた。警護する兵士はサブマシンガンの銃口をこちらに向け、カメラを取り上げ撮影済みのデータを検閲する。

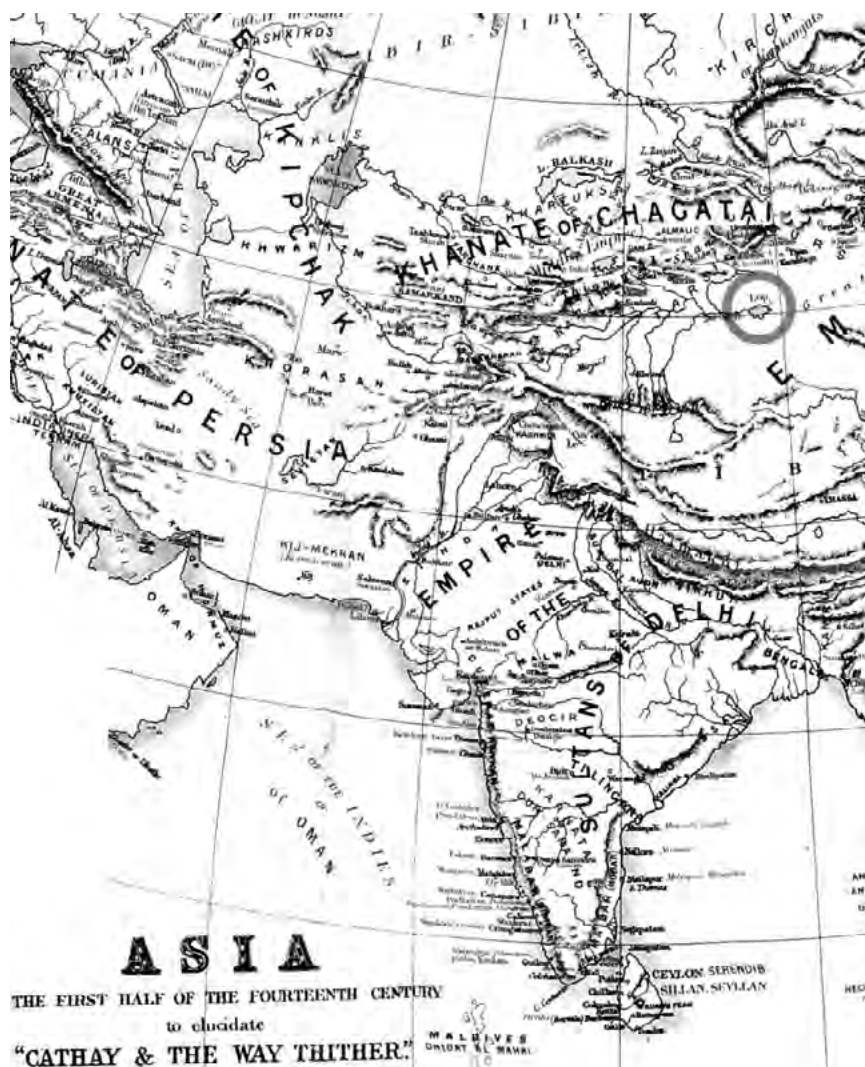
そこは岩塩にわずかに含まれるリチウムペグマタイトの精製基地であろうが、さらにある消息筋は、この地でC T B T 包括的核実験禁止条約の国際監視制度の目をかいくぐって秘密裏の地下核実験が続いているとも伝える。

本書を通して共に消滅してしまったシルクロード幻の天山南路を、西に向かい凄まじい砂嵐と、全てを灼きつくすかのような炎熱に歯を食いしばって、時空を遡るように楼蘭を目指そうではないか。

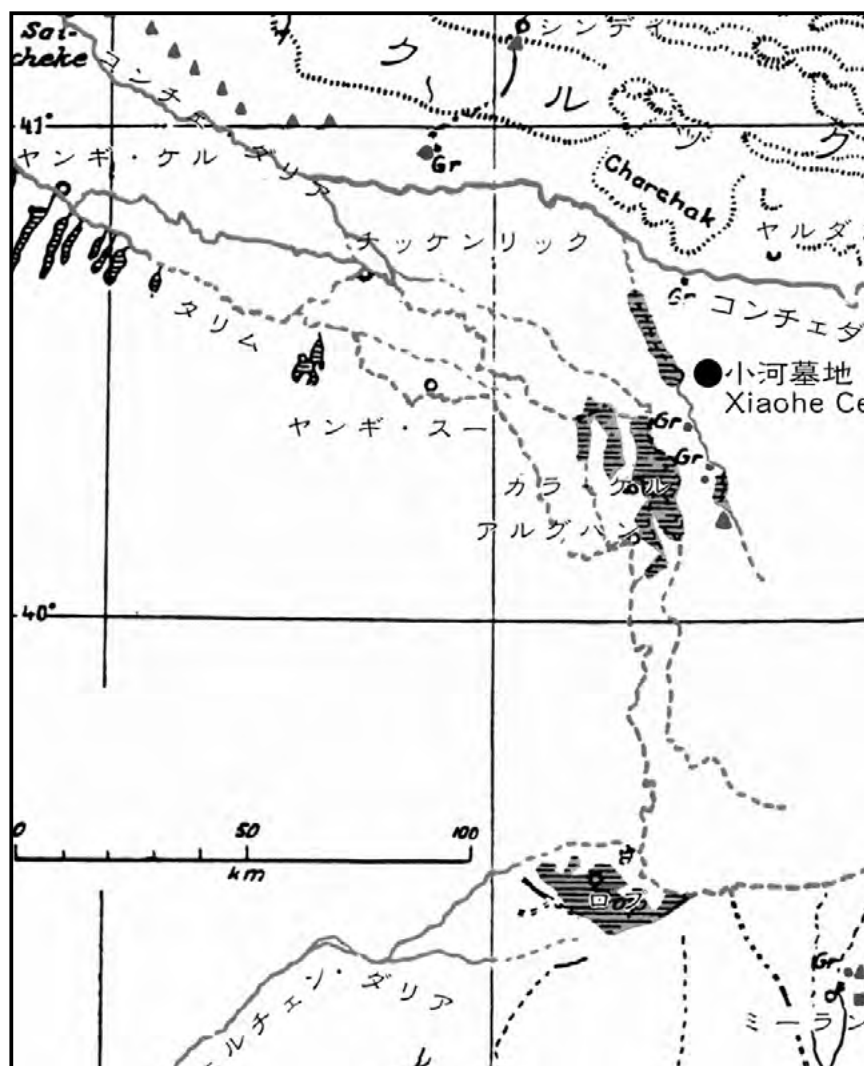
望むなら連れて行こう。そして水を失くすという、いずれ人類も直面する最大の難局を目のあたりにしようではないか。

山田
徹









西暦327年晩夏
落陽のロブノール

太陽が西に傾き、あたりを黄金色に染めはじめると、娘は湖までやって来て沐浴をする。それが夏の日課だった。

すべてを灼き尽くす烈日が終わり、草の原に湖を渡るやわらかな風が立ち始めて幾日か経った。太陽の沈む位置が左手に下り時刻も早くなってきた。

深紅の玉のような花を無数につけた吾亦紅^{われもこう}の群生が、黄金色に染まる草原の一面で踊るように風に揺れている。それを分けて伸びる一本の小径は、やわらかなやさしい土の感触だ。

「この美しい風景と、この時が永遠でありますように」

娘はそう念じながら軽やかに駆けた。娘の立てた風で、吾亦紅の花たちが、一層ざわざわと揺れている。

もう数日もすれば湖に沐浴することは叶わなくなる。秋の訪れは、まるで漢の官吏のように冷たくて早い。

湖は王国の命を繋ぐ聖なる存在。この国の人々にとって信仰の対象であり、つまり神そのものである。

湖の大きさは東西に三〇〇里（*註(二)中国の一里は約五百米）、南北に三〇〇里と想像もつかない大きさで、湖をぐるりと一周したことのある者の話など聞いたことが無い。

この国の名はクロライナ。

はるか昔に漢という国が楼蘭と漢字を当ててから「楼蘭」が正式名称になった。発音もいつの間にかローランになっていったのだと聞く。

王妃である優しく美しい母は、この国は三〇〇〇年の歴史があるのよ、と話す。

この国は交通の要衝で、さまざまな文化や人々が往来している。仏教も東に伝わる過程でいち早くこの国にも伝わり、それが人々の心に安寧をもたらせ仏教とともに渡来したカローシュティー文字（*註③）が使われていた。そこに漢人らが全ての言葉に漢字を当て、例えばこの聖なる湖ロブノールも「羅布」とした。羅の布、つまり羅馬人の求める東の国で織られる布の中継地とでもしたのでろうか。ノールとは匈奴の使う言葉で湖という意だ。

娘が腰に巻いた白い布は、長安からこの国を通り西に向かう商人たちが、通行税に添え楼蘭王に献上した品のひとつだ。確かに「羅の布」なのだろう。すべらかな手触りはこの世のものとは思えない。美しく光を透過し陰翳を際立たせ娘の下半身を飾っていた。

西の国の王族らが、その羅の布を「シート」とか「アブリシャム」などと呼び、競って求めるのだ。金と同じ重さで交換され、商人たちは莫大な富を得る。その絹を運んだことから「丝绸之路」と呼ばれるようになるとは、このころには知る由もなかった。

駱駝の背には沢山の絹織物が積まれ、何頭もが連らなつて朝日を背に西に向かう。その交易路を行き交う旅人は商人と呼ぶには遅しく、そして優しい冒険者たちだ。西からも商人たちはやって来る。きまつて夕日を背に、長い影に先導されるようにこの国に辿り着く。まさに命からがらの旅なのである。

彼らは砂漠の旅で陽に灼けているが、湖で水浴びをする姿を見かけると肌の色はたおやかに白く顔の彫りも印象的に深い。眼窩も深くて西の彼方の民族を思わせる。過酷な長旅で痩せてはいるが一樣に魅力的な男たちだ。

娘の首にかかる空の色を映したペルシアンブルーの石を金の鎖でつないだネックレスは、その

男たちを幾日も養生させた礼で受け取ったものだ。そのネックレスを見ると遙か西の国にはなにがあるのだろうか。ミリアは思いを巡らせ、そこに暮らす人々の美しさや暮らしぶりの絢爛さが娘の心を捉えて離さない。

西から来る商人らは、おおよそ二ヶ月ほどを楼蘭で過ごす。胡楊の熾きで焼いた魚、スープと新鮮な野菜や小麦など穀類料理、羊の柔らかい肉を食べ、数年かけた旅に消耗した身体をゆっくり回復させ一回り大きな身体に戻ると、ふたたび朝日の昇る方角に向かう。

隊商の間で名の知られた楼蘭の駱駝市では、商人たちの瘦せた駱駝を預かり元気な駱駝を貸し出す。

駱駝は預かった数ヶ月の間に大好物の胡楊の下葉をたらふく食べ湖の水を飲むと、みるみる太り、倒れていた瘤も大きくなって元気になるのだ。長安からの帰路に再び自分の駱駝に会うと、商人たちは大喜びをして、たくさんの絹などの荷を積み替えて西へ向かう。その逆もまた多いのである。

駱駝市でグウグウと鳴く声は、王国の小路を伝わってあちこちに響く。娘はそれを聞くのが好きだった。小路の脇には水路が走っていて、丘の上の自噴井戸から高い水圧で水は溢れ、縦横の水路に走らせることで生活のそばに新鮮な水が届いていた。商人らはその水路を見て故郷を思うと言う。世界のどこにあっても人と水の関係は、思う以上に大切でかけがえが無いのだ。

その商人らが運ぶのは絹織物ばかりではなかった。楼蘭王は世界の情勢を得るため常に商人たちを歓待した。商人たちはこの国でいつの間にか国王に心を許し、そのまま住み着いた男も少なくなかった。それほどこの楼蘭国は魅力的だったと言える。

国王は商人たちから西の国で起こる数々の興亡を聞き身震いを覚え、東の国の血なまぐさい殺し合いの話に心を塞いだ。

この時代の情報は絹織物と同じく一握の砂金以上の価値があった。

商人らは品物を売買するだけでなく、情報も売りまた仕入れもしていたのである。

極論を言えば、旅の成功はただその一点に収斂する。つまり無事にこの地まで辿りついたという事、そしてその道筋と見聞した事象を伝えるだけでも旅には大きな価値がある。

ただ彼らからもたらされる情報は全てを鵜呑みにできるほどの精度はない。その情報を持ってきた者の人格や意図などさまざまな要素を組み合わせ確度をあげなければならない。

そうした能力が国王らには求められ、国の重要な決定を下すためには欠かされざるものだった。旅の商人らを接待しこの地のワインを振舞い、酔わせ、内心に留められた言葉を聞き出しながらいくつもの夜を過ごした。

娘は長い髪を下ろし腰の布を取ると乳房まで水に入った。金色の波紋が広がり、無数の光が玉のように跳ねる。誰かがもし見ていたならば、きっと心を奪われるだろう。

昼の太陽で温められた表面の水は、ことのほか気持ちが良い。いっぼうで足元の水はひんやりとして足の指先に刺激を与える。娘は水面近くの温かな水で髪を洗い頭から潜って髪をすすいだ。そして少し泳ぐと光る虫たちが娘の身体にまとわりついた。

娘の肌はわずかに褐色を帯びていた。西陽を浴び、肌も髪も黄金色に輝く。その髪の色をした女は楼蘭では少なくない。娘の母である王妃も豊かな金色の髪に青い瞳をしており、神々しいま

でに美しい。

その不思議な髪を湖面をほんの少しざわつかせながら流れるやわらかな風が、もてあそぶかのように乾かしていく。

顔を上げ西の空を見ると、いまにも沈む大きな火球のようになった太陽の前を胡楊の丸木舟に溢れるほどの魚を積んだ漁労の民が小さな木の棧橋に向かって横切っていく。夕陽に浮かぶそのシルエットに娘は心が弾んだ。美しく情緒的で歌声が聞こえてくるようだった。

娘の名前はミリア。

ミリアには気になることがあった。それは湖の水の塩が濃くなってきていることだ。それはもう何年も前からで魚の獲れる場所が西のほうに偏ってきていると聞く。

ミリアの住む王宮は仏塔のある楼蘭国の中心だ。そこは湖の中心よりかなり北西側にある。塩分濃度はこの辺りから北に向かうほどに低くなる。少し北に塔里木河の河口があるため、天山の雪融け水を豊かに送り届けていた。河口付近の塩分は気が付かないほど低い。

河口はデルタを形成し多様な生命のゆりかごになっている。付近には湟魚と呼ばれる少し体の黒い魚が集まる。河口の砂洲から少し落ち込んだ辺りの魚影が濃い。

湟魚は川を遡り産卵して湖に帰ってくる。毎年産卵をして長い生命を持ち一〇〇年生きると言うがそんなこともあるまいと思う。遡上して産卵するとはいえ、さほど上流に遡るのではなく緩やかな川の流れを数里ほど上流に行けば、タマリスクや胡楊の根が川に浸る岸辺があり、その岸辺の根や水生植物に産卵する。水に浸かった根の周りには細かな海老や水生昆虫がいて、川の中は外敵が少なく孵化した稚魚たちは川が運ぶ栄養や、その小海老たちを食べてみるみる太り半年

もしないうちに魚体がやや黒くなりはじめ湖に下ってくる。河口付近は砂が堆積し水深が浅いので幼魚を狙う鳥たちが集まり、にわかに湖面が沸き立っていく。

その様子を望楼から王や王妃らは良く眺めていた。生命の輝きが愛おしい。

湟魚はとても旨い。タマリスクの枝を串にして胡楊の熾^おきで時間をかけて焼くのだ。香ばしさとしっかりした脂ののった白身は人々の心と腹を満たしてくれる。ぶつ切りにして少し南の塩分の濃い湖水で炊くと誰もが腰を抜かすほどに旨くなる。楼蘭の民らは、これほどまでのご馳走に恵まれているのだという幸福感に包まれる。

つまり幸福とは食べ物によってもたらされる。

「獲りすぎではいけない。必要な量の少し足りないくらいを獲る」

漁師はその定めを胸に刻んでいる。その漁師らの丸木舟を着ける栈橋は数年前に隊商で訪れた西の国の男が病に斃れ一年ばかり滞在していた際に、彼の仲間が「なにかこの地でお役にたつことはないだろうか」とそう言つて王の許可を得て造つたものだ。

王と王宮の者たちはこの男を懸命に看病し養生させ無事に健康を取り戻させた。

ミリアも心を込めて手伝つた。そして再び旅を続けられるようになったその者たちは涙にうれながら謝辞を重ね、商売の荷の中からミリアに空の色を映した大きな石のネックレスを贈つた。

その石は「ロブの湖の精、そのものだよ」とだれもがそう話し中には手を合わせる者さえいた。その男たちが造つてくれた栈橋は丸木舟が係留でき、漁に出るのも魚を揚げるのも楽になったと喜んだ。その栈橋も水位の低下に悩まされ、胡楊の足を切つて低く造り直していたが、その高さにさえも水がなくなつていた。

なにか悪いことが起きているのではないのか、王国の誰もが不安を口にしはじめて年月が過ぎ
ていた。

※この続きは実際の本書にてお楽しみください。